

茅葺き民家を訪ねて

～石岡市八郷地域に残る日本の郷里～



一般社団法人 茨城県観光物産協会

住所 茨城県水戸市三の丸1-5-38

TEL 029-226-3800

FAX 029-221-9791

E-mail ibarakik@atlas.plala.or.jp

いしおかしやさど

八郷地域は、茨城県のほぼ中央、その昔常陸国府が置かれた歴史ある石岡市にあります。「日本の里 100 選」にも選ばれている昔懐かしい風景が残るのどかな地域です。実は茨城県は、「関東の茅葺き王国」と呼ばれるほどたくさんの茅葺き屋根が残っています。なかでも八郷地域には現在約70棟が残っており、いまでも生活住居として大事に使われています。

茅葺きが残っているエリアは、筑波山麓の農村エリアです。八郷地域は温暖な気候に恵まれ、農家の暮らしが比較的豊かに送られてきました。このことを背景に、農家の家屋は美しく整えられるようになり、茅葺き屋根にも「筑波流」と呼ばれる装飾技巧が発達していきました。



茨城県フラワーパークの展望台から望む八郷地域



葺き方と茅刈り

～筑波流～

屋根の材料となる茅の葺き方には地域的な特徴があります。八郷地域は、冬場天気が良く、雪国から多くの職人が出稼ぎに来て、職人が技を認められるために競合が生じたことから技巧的な発達が見られました。日本有数の装飾性と技巧を誇る「筑波流」茅手職人はここから誕生しました。

筑波流の層になった茅葺き屋根は「トオシモノ」と呼ばれ、1番下が麦わら、その上に黒くなった古い茅と明るい色の新しい茅を交互に重ね、5～7層に葺きます。刈り込んで仕上げた軒のしま模様の美しさが特徴です。

また棟の両端にある「キリトビ」には、家の繁栄を願う「寿」や「松竹梅」などの絵柄を配し、家々の個性が光ります。その他にも、台所などの水回り部分のキリトビには『水』と書いてある家もあります。

そして屋根の上には、家の中で火を焚く際に出る煙を出すための「煙出し」があり、そこにも装飾性が出ています。



トオシモノ



煙出し



様々な絵柄を施したキリトビ

～茅葺き屋根の材料となる“茅”～

かつての八郷地域では7割の住宅が茅葺き屋根でした。そして山林の至る所に材料の茅を刈るための“茅場”が存在し、住民はそこで茅を刈り、屋根の茅葺きに利用していました。つくば周辺の茅葺きでよく使用されるのはススキ。太く、しっかりとしたススキではなく、日光の良く当たる場所で育った、細長くしなやかなものが良質とされます。

刈り取られる時期は12月。1～2月に大雪が降ると軸が曲がるので、その前に刈り終えなければなりません。つくば市の研究機関「高エネルギー加速器研究機構(KEK)」の広大な敷地内にススキが群生しており、茅場として利用することが許されています。毎年12月にKEK、石岡市協力のもと、県内外のボランティアや関係者で「筑波山麓茅刈り隊」を組んで行います。



◇ 上青柳地区 木崎家 ◇

母屋と書院、風情ある2棟の茅葺き屋根を持つ木崎家にお伺いしました。

● ケヤキと屋敷林に包まれた茅葺き民家

江戸期に始まる木崎家は、大きな門を入ると母屋と書院の2棟があり、手入れされた美しい庭が広がります。茅葺きの母屋は江戸時代後期の築。その後に建てられた書院も茅葺きのまま居住されています。

耳を澄ますと風の音、虫の音などの自然の音のみが聞こえ、初夏にはゲンジボタルが群生します。豊かな自然にも恵まれた木崎家は、これまでに何度も映画やドラマのロケ地となっているそうです。



木崎家 書院【左】母屋【右】

● イメージアップを目指して

木崎さんは「やさと茅葺き屋根保存会」の会長を設立時より務め、ご自宅の維持もされながら、保存会の活動の中心を担われています。

やさと茅葺き屋根保存会は、農山村文化を大切にしながら筑波山麓の茅葺き民家を後世に伝えようと、平成16年に設立されました。毎年12月に行う茅刈りをはじめ、茅葺き民家の見学会や交流会なども行っています。平成19年には、茅葺き文化の保存活動や価値を評価され、いばらきイメージアップ大賞奨励賞を受賞しています。



● これからの課題と茅葺きへの想い

昔のように集落ごとに茅場がなくなり茅の確保場所が課題となりましたが、保存会が中心となり現在はつくば市の敷地を有効利用しています。

また、茅手職人の後継者不足の問題もありますが、木崎さんは洗練された技術を誇る民家を貴重な農村の文化遺産として大事にこれからも残していきたいと語られました。



やさと茅葺き屋根保存会会長の木崎眞さん

◇ 佐久地区 大場家 ◇

観光ぶどう園を経営されている大場家にお伺いしました。

● 江戸時代から受け継がれた職人の技

樹齢約 1300 年の「佐久の大杉」がある佐久地区で、大場さんは観光ぶどう園を営みながら、やささと茅葺き屋根保存会の副会長を務めています。大場さん宅は江戸時末期に建てられたもので、平成 17 年に国指定登録有形文化財に登録されました。

棟の両端にある小口部分「キリトビ」は、筑波流ならではの高い装飾性を誇り、竹や塗料を使って「松竹梅」が表現されています。職人が代わった今でも、大場さんは茅葺きに特別なこだわりを持っています。

また、茅葺きの家は夏涼しく、冬はとても寒いそうです。そんな冬でも、炭火のこたつがあればなんのその、とおっしゃっていました。

● お客様からの励ましの声が支えに…

観光ぶどう園を初めて 50 年。農園には県内外からたくさんの観光客が訪れます。

「観光客の方からいただく励ましの声が、本当に日々の励みになっています」と、大場さん。

その中でも、大場さんが特に印象に残っている言葉が、東京から来た女性の方に言われた「贅沢ですね——」という一言。こんな素敵なところに住めるなんて羨ましい、とおっしゃっていたそうです。ぶどう園の経営と茅葺きの維持との両立は大変ですが、そんな励ましの声が大場さんの大きな力になっています。

ぶどう狩りが楽しめるのは 8 月上旬から 10 旬頃。ゆったりとのおどかな雰囲気の中、豊かな自然で育ったおいしいぶどうを味わうことができます。



大場家 母屋



大場観光ぶどう園を営む
大場克己さん

—若手茅葺き職人—

石岡市常陸風土記の丘では、施設内の茅葺き屋根を維持する人材を確保するとともに、「筑波流」と呼ばれるこの地域独特の茅葺き技術を継承するため、平成18年より「茅葺き技術者育成事業」を行っています。地元出身の若手2人が、「茅手」と呼ばれる職人を目指しています。



渡邊 大さん(33歳)【左側】
岡野 量平さん(28歳)【右側】



ヤマガヤ(左側)は扱いづらいが、シマガヤ(右側)は下ごしらえをしなくても良く扱いやすい。

使用する茅の倉庫



◆茅葺き職人を目指したきっかけ

渡邊さんは、常陸風土記の丘の元スタッフで7年目になります。5年前、前所長に誘われ目指すようになりました。

岡野さんは、実家が茅葺き民家で小さいころから身近に育ちました。茅葺き民家を守っていきたいという気持ちがあり、新聞で「茅葺き技術者育成事業」の募集を見て応募し、去年の5月から常陸風土記の丘でお仕事されています。

◆普段のお仕事

現在は、茅葺き屋根の修復が主な仕事。ベテランの茅葺き職人の親方の元、技術を学びながら施設内の屋根のほか、地域の民家や神社などの茅葺き現場で、年間を通して活躍しています。また、藁の備蓄なども仕事の一つ。その年に確保した藁はその年に使います。今は、一から茅葺き屋根を作る事はほとんどなく、渡邊さんは、今までで3回程しか経験してないとの事です。

◆お仕事で大変な事、嬉しかったこと！

「すべての作業が難しく毎日が勉強で、一生修行とのこと」

「できあがった茅葺き屋根をみて、お客さんが喜んでくれること」

「さらに茅葺き職人を目指す人がはいてほしい」とおっしゃっていました。

やさといいとこスポット

◆佐久の大杉

佐久集落にある鹿嶋神社に鎮座するご神木の杉の木。胴回りは9mもあります。

樹齢は1300年以上で、室町時代の1427年、神社が創建されたころ、「すでに千年近い杉」といわれていました。県指定記念物に指定されています。

荘厳な雰囲気には圧倒されます！！



◆フルーツライン(観光果樹園ロード)

八郷を南北に走るフルーツライン。豊かな水と温暖な気候に恵まれ、一年中果物のなる道。毎年皇室に献上されている富有柿(ふゆがき)を始め、ぶどう、梨、栗、みかん、イチゴ、ブルーベリーなど多様な果物が栽培されています。

ドライブしても気持ちがいい！！



◆常陸風土記の丘

石岡市に残る旧石器時代や縄文時代からの数々の古墳や遺跡を始め、常陸国の歴史が学べる施設です。各時代の茅葺き家も多く保存され、P5で紹介した茅葺き職人さんたちも在籍しています。

日本一の獅子頭！！



いしおか茅葺きマップ



- ◆茅葺き民家をご見学される場合は、必ず居住者の了解を得てください。
八郷地域の茅葺き民家は、ほとんどのお宅が住居として使われていますので、了解を得ずに撮影したり、敷地内に無断で入ることはできません。
「やささと茅葺き保存会」では、年に1～2回ガイド付見学ツアーを行っております。
- ◆見学・取材をご希望の方は下記にお問い合わせください。
◀お問い合わせ▶ 石岡市八郷総合支所商工観光課 TEL 0299-43-1111